

<論 説>

## 『コリオレイナス』論 ——「コリオライのホスト」をめぐる

恩 田 公 夫

(1)

『コリオレイナス』はシェイクスピアが(ノース訳の)プルタークの『英雄伝』を主材源として書いた四つのローマ史劇のなかでもっともその材源に忠実な作品とされているが<sup>1)</sup>、それでもその劇化にあたってプロットや登場人物の性格創造のうえでさまざまな改変が加えられている。一幕九場の最後に現れる「コリオライのホスト」をめぐるエピソードにもそうした改変が行われている。このささやかな挿話に関しては注釈書に短いコメントが見られる程度で、本格的にこれを取り上げて論じている批評家・研究者はほとんど皆無である。無論短い言及がないわけではない。しかしそれらは、論者がこのエピソードのくだりを読むたびに感じてきたある種の割り切れなさ——主人公にたいする整理しがたい感情——が与える強い印象を十分に説明し尽くしていないように思われる。本稿はこの不当に(と論者には思われる)等閑視されてきた「コリオライのホスト」のエピソードについて、現代の主要な注釈書を参照しつつ、シェイクスピアによる改変の意味を探り、論者の「整理しがたい感情」を整理することを目指している。<sup>2)</sup>

(2)

プルタークでもシェイクスピアでもこの「コリオライのホスト」のエピソードが現れるのは、主人公カイアス・マーシャス(後のコリオレイナス)が敵のヴォルサイ人の町コリオライでの包囲戦に超人的な武勇を発揮して勝利し、さらに近くで苦戦中の執政官コミニアス指揮下の本隊のところへ援軍に駆けつけ、獅子奮迅の働きで勝利を呼び込んだあとのことである。大将のコミニアスは彼の武勲を褒めたたえ、その功に報いようと今回の戦いで得られた戦利品のうちの十分の一を彼に与えようとする。ここから先はプルタークとシェイクスピアでは話の順序や内容が違って来る。

まず『英雄伝』では、コミニアスはマーシャスに武勲の印としてさらに馬一頭を贈ることにする。それにたいし、マーシャスは馬と褒め言葉はありがたく頂戴するが、そのほかの申し出

については、「名誉ある褒償というよりは傭兵の報酬」(rather a mercenary reward, then an honorable recompence)<sup>3)</sup>だからと言って固辞し、他の兵士たちと同じ分配で満足だと答える。そしてさらに言葉を継いで言う。

ただ一つ、特別のはからいを(と彼は言った)お願いします、どうか認めていただきたい。ヴォルサイ人のなかに私がおの家に泊まってもてなしてもらったこともある古くからの友人がいます。裕福で正直な男ですが、今は捕虜となっています。昔は自分の国でたいへん裕福な暮らしをしていたのに、今はあわれな捕らわれの身となって敵の手中にあるのです。彼はこのような不幸な目に遭っておりますが、ただ一つの危険から、すなわち奴隷として売られるということから、彼を救ってやることができたなら、私にとってこのうえない喜びなのです。

Only, this grace (sayed he) I crave, and beseeche you to graunt me. Among the Volsces there is an olde friende and hoste of mine, an honest wealthie man, and now a prisoner, who living before in great wealth in his owne countrie, liveth now a poore prisoner in the handes of his enemies: and yet notwithstanding all this his miserie and misfortune, it would doe me great pleasure if I could save him from this one daunger: to keepe him from being solde as a slave.

マーシャスのこの言葉を聞いて兵士たちは喝采する。そしてこの状況を受けてコミニアスは彼が拒むことができないような報酬として、「コリオレイナスという第三の名前」(the third name of Coriolanus)を贈ることになる。

このようにプルタークでは「コリオライのホスト」のエピソードは、マーシャスが戦利品分配での特別扱いを断って無欲さを誇示する雄弁の最後に位置し、その無欲さを聴衆に強く印象づける身振りとなっている。このエピソードがその雄弁のクライマックスを構成していることは、このくだりだけが例外的に直接話法で書かれていることから窺われる。さて、このエピソードがこの位置に置かれたことからもたらされる一つの重要な帰結は、この話がそれだけで独立していたならば強く表現していたであろうマーシャスの情け深さ、寛大さが、その無欲さの強調の影に隠れてしまっていることである。現にマーシャスの言葉を聞いた兵士たちは、「彼のそれほどの欲のなさを見て、彼の足るを知る心と禁欲的な態度に感嘆する者のほうが、彼の武勇を称揚する者よりも多かった。」(they were moe that wondred at his great contentation and abstinence, when they sawe so litle covetousnes in him, then they were that highly praised and extolled his valliantnes.) またプルターク自身も、「勇敢であるよりも富をじょうずに使うほうがはるかに称賛に値するが、富をじょうずに使うよりもそれを欲しがらないほうが一層立派である」(it is farre more commendable, to use riches well, then to be valliant: and yet it is better not to desire them, then to use them well) と述べてマーシャスの無欲さをたたえているが、'pity' や 'magnanimity', あるいは 'mercy' といった言葉は現れない。この

エピソードはマーシャスの欲のなさとともに、いやむしろそれ以上に彼の慈悲心や寛大さといった徳を物語るはずのものであるが、プルタークではテキストで見るかぎり、前者の面ばかりが強調され、後者の面は表面に現れていない。

さて、次にシェイクスピアの場合である。彼はプルタークではテキスト上から抑圧されてしまったマーシャスの一面が顕在化するように、いくつかの点で改変を行っている。まずこのエピソードが語られるタイミングであるが、マーシャスが戦利品の十分の一という分配を拒み、それを受けてコミニアスが名馬の誉れ高い自分の愛馬とともに「コリオレイナス」の称号を彼に贈ったあとになっている。『英雄伝』でこのエピソードが果たしていた機能は、マーシャスの無欲さを強調し、そのことによってコミニアスに「彼〔マーシャス〕のこの度のみごとな働きにたいし、彼が拒むことのできないような報酬を授けよう」(we will geve him suche a rewarde for the noble service he hath done, as he cannot refuse)<sup>9)</sup>と言って「コリオレイナス」の名を授けさせることにあった。プルタークにおいては、このエピソードはマーシャスに「コリオレイナス」という称号を与えることに奉仕させられていると言ってもよい。ところがシェイクスピアにおいては、このエピソードは称号授与のあとに置かれたためにそのような役割から解放される。その結果、このエピソードが本来的に持っているはずの、マーシャスの慈悲心や寛大さといった温かな人間性が前面に出てくるのである。

マーシャスの人間的な側面を強調するこのような改変は、「コリオライのHOST」をめぐる挿話の現れるタイミングだけでなく、次のようにマーシャスの言葉自体にも現れる。プルタークの場合のように大勢を前にしての雄弁とは趣を異にし、散会間際に、忘れていたことをふと思い出したというような私的な口調でマーシャスは言う。

………たったいま

素晴らしい贈り物を固辞したのに、今度は私から將軍に  
お願いせねばなりません。………

昔、私はこのコリオライで貧しい男の家に

泊まったことがあるのですが、彼は親身に世話をしてくれました。

今日その男に呼ばれ、見ると捕虜になっていました。

だがそのときオーフィディアスの姿が目に入り、怒りが  
私の憐れみを圧倒してしまったのです。どうか

その男を釈放してください。

… I, that now

Refus'd most princely gifts, am bound to beg

Of my lord general. . . .

I sometime lay here in Corioles,

At a poor man's house: he us'd me kindly.

He cried to me. I saw him prisoner.  
 But then Aufidius was within my view,  
 And wrath o'erwhelm'd my pity. I request you  
 To give my poor host freedom.

(I. ix. 76-79, 80-85)<sup>4)</sup>

まず目につくのはプルタークのホストが「裕福」(wealthie)であったのに、シェイクスピアでは「貧しい」(poor)に変えられていることである。ペンギン版の注釈はこの改変について、“By making the man poor Shakespeare increases an audience’s sense of Martius’s magnanimity and fundamental decency.”として、この改変がマーシャスの「寛大さと生来の品位」を観客に印象づける働きをしているという読みを示している。また、これは従来見落とされてきたことであるが、このホストはプルタークではマーシャスの「古くからの友人」とされているのに、シェイクスピアでは昔彼が泊めてもらって親切なもてなしを受けたと書かれているだけである。「昔」(sometime)は、マーシャスが男の世話になったのが一回限りであったことを含意しており、シェイクスピアでは二人の間には、プルタークの場合ほどの長く深い交友関係はなかったことに変えられていることになる。それだけにマーシャスの「寛大さと生来の品位」が一層強調されていると言えよう。

だが、シェイクスピアによる以上のような改変に、主人公マーシャスの「寛大さ」や「憐れみ」といった人間的な面の強調を読み取る解釈には、二つの点からの疑問が予想される。第一に、マーシャスが昔親切を受けたとはいえ貧しい男に憐れみをかけるというのは、ローマの平民たちにたいして侮蔑的な言動を繰り返し、そのために彼らの激しい反感を買っている彼の常日頃の階級差別的な態度とは整合性を欠いているように思われる。この矛盾をどう説明したらよいのであろう。Vivian Thomas 著 *Shakespeare’s Roman Worlds* はシェイクスピアとプルタークとを比較対照しながら論を進めているが、この改変の理由について、ためらいがちにはあるが、次のような解釈の可能性を提起している。

This is the only time that Martius shows any concern for a *poor* man. In Plutarch’s account the man is rich. Is Shakespeare implying that Martius has the capacity to be sympathetic to a poor individual so long as he does not perceive him as a member of inferior social class? Is his conception of a sharp division between the noble and ignoble confined to Rome? Or is there some other explanation?<sup>5)</sup>

男はローマ人ではない、したがって彼にはローマにおける貴族階級と平民階級という分類が適用されず、それゆえ彼はマーシャスの差別的あしらいを免れるのだ、という解釈である。ただ、この解釈には著者自身が懐疑的である。

ケンブリッジ版は“By making him ‘poor’ Sh. shows us that the hero is not contemptuous of poverty as such.”として、その矛盾の解消をはかる。いや、もっと正確に言うなら、そのような矛盾などそもそも存在しないのだと暗に言っている。マーシャスがローマの平民たちを侮蔑するのは彼らが貧しいからではなく他に理由——例えば戦場での臆病さ、戦利品をあさる食欲さ、デマゴグに簡単に操られる移り気など——があつてのことである、だから彼がコロライの貧しい男に同情を示してもそこに一貫性が欠けていることにはならない、という論法である。

Vivian Thomasが懐疑的にはあれ示している解釈も、ケンブリッジ版の注釈が断定的に示している解釈も、コロライの貧しい男とローマの平民たちは、マーシャスの頭のなかでは切り離された別個の存在なのだ、と考えることでこの矛盾を説明しようとしていることでは軌を一にしている。そして、マーシャスの同情心をコロライのホストに限定し、ローマの平民たちにまで及ばないものとしている点でも一致している。確かにこうした解釈は主人公の矛盾した態度をよく説明してくれる。しかし、矛盾をよく説明してくれるからといって、それでその解釈が妥当であるということになるわけではない。我々はこの場面で主人公がコロライの貧しい男にたいして示す同情心に驚かされる。彼が常日頃ローマの平民たちにたいしてあからさまに見せている偏狭な階級差別意識との間に落差を覚える。このことは否定しがたいのであって、その落差を上のように説明することで埋めてしまおうとするのはむしろ妥当性を欠くのではないだろうか。オックスフォード版がこの‘wealthie’から‘poor’への改変に関して、“Shakespeare . . . links this Volscian to Rome’s plebeians.”という注釈をつけているように、やはりここではコロライの貧しい男とローマの庶民の間の距離を強調するよりも、むしろその近さをこそ感じ取るべきではないだろうか。<sup>6)</sup> そのことで主人公の日頃の差別的な態度との間に矛盾が生じたとしても、その矛盾は矛盾として受け入れたうえで、なぜ主人公はそのような矛盾した態度をしめすのかを考えるほうが、いたずらに彼の人間的な面を矮小化して悲劇の主人公としての存立を危うくすることよりも妥当な選択に思われるのである。

さて、「コロライのホスト」をめぐるエピソードに、とりわけその“welthie”から“poor”への改変に、主人公の「寛大さと生来の品位」、あるいは同情心といった人間的な美徳の強調を読み取ろうとする解釈にたいする第二の疑問は、第一のものよりももっと厄介である。この疑問はマーシャスがせつかく男の解放を嘆願してそれを認められながら、肝心の男の名前を忘れてしまい、ついに彼を助けてやれずに終わってしまうことに発するものである。プルタークでは男の名前は触れられていないものの、忘れられたことにはなっていない。男は当然解放されたものと読者が受け取るように書かれている。シェイクスピアはなぜこのような改変を行ったのであろうか。マーシャス自身は男の名前を問われて次のように答え、忘れたのは疲労のせいだとしている。

……………はて、忘れてしまった！

疲れたのだ、まったく、記憶力までくたびれている、

ここに酒はないのか？

... By Jupiter, forgot!

I am weary, yea, my memory is tired;

Have we no wine here?

(I. ii. 88-90)

ケンブリッジ版は旧アーデン版の R.H. Case の注釈を引用しつつ、“The forgetfulness of the name is one of Sh.’s natural touches, ‘the amnesia of an exhausted man’ (Case)” と述べ、この改変がマーシャスの疲労を印象づけるためのシェイクスピアの加筆であったとしている。確かにマーシャスの失念によって我々は彼の疲労を強く感じさせられる。それは、戦場で彼が示した超人的な強さにも関わらず、彼にも神ならぬ人間として「自然の」(natural) 弱さがあることを印象づける。しかし、この改変はただそれだけの効果を狙ったにしては重すぎるといった感じが拭いがたく残るのもまた事実である。一人の哀れな男の運命が百八十度変わってしまうだけではない。このエピソードの前半部で好意的な方向に向かいつつあったマーシャスにたいする我々の評価が、この改変によって大きく揺らがざるをえなくなるのである。

アーデン版は基本的にはケンブリッジ版と同じ解釈をしつつも、次のように別の解釈の可能性を否定的にはあるが示唆している。“The forgetfulness in Shakespeare is owed, *not to an affectation of magnanimity*, but to ‘the amnesia of an exhausted man’ (Case).” [斜字体論者]ここではマーシャスの失念が、そもそも彼には本心から男を救おうなどという気はなく、ただ「寛大さを装っていたため」に生じたとする解釈があることを示しつつ、それを退けている。一方、オックスフォード版はアーデン版が退けた解釈の方向にも、慎重に断定を避けつつも、その可能性を認めようとしている。“It [This forgetfulness of Coriolanus] is caused by natural fatigue, but may also suggest that his request was more a matter of *noblesse oblige* than of genuine fellow-feeling.” マーシャスの嘆願は「高い身分に伴う義務」によるものであって「真の同情」に根ざしたものではないのかもしれない、とするこの解釈は、彼が男の名前を忘れてしまう理由を確かにうまく説明してくれる。しかし、このように彼から「真の同情」を奪い取ってしまうことは、やはり彼の人間的な面を矮小化し、悲劇の主人公としての存立を危うくしてしまうのではないだろうか。もっと他に、彼の失念と「真の同情」とがうまく併存できるような解釈は考えられないであろうか。

マクミラン版はマーシャスが男の名前を失念してしまうことに関して次のように述べ、オックスフォード版の解釈とは相反する読み方を提示している。

It is sometimes suggested that Martius is simply content with a noble gesture, and callously dismisses the matter with his call for wine; but Shakespeare does not imply

that Martius is half-hearted or insincere in his concern for his host. His exhausted forgetfulness is, rather, a comment upon the limitations of warrior code, compelling men into inhuman commitment.

マーシャスが「彼のホストを気づかう気持ち」に嘘はない、にもかかわらず彼が男の名前を忘れてしまうのは「男たちに非人間的な行動への専心を強いる武人の掟」のせいだ、というわけである。この解釈は我々がこのエピソードに見てきた二つの矛盾——マーシャスがコリオライの貧しい男にたいして示す同情と彼がローマの平民たちにたいして見せる侮蔑的な言動、彼がその男に示す憐れみとその男の名前を失念してしまうこと——を一挙に、しかも彼の人間的な面も軽視せずに、うまく説明してくれる。しかも、この解釈はシェイクスピアが追加したもう一つの重要な改変ともみごとに調和する。

He cried to me. I saw him prisoner.  
But then Aufidius was within my view,  
And wrath o'erwhelm'd my pity.

(I. i. 82-84)

「(宿敵オーフィディアスにたいする) 怒りが、(捕虜となった恩人にたいする) 私の憐れみを圧倒してしまった。」これはシェイクスピアによる主人公の性格創造をよく物語る言葉である。マーシャスに憐れみという人間的な感情がないわけではない。ただ、彼を縛っている武人としての役割が、憐れみの情を圧倒するほどに大きな地位を占めているということなのである。

さて、以上のように「コリオライのホスト」をめぐるシェイクスピアの改変に、主人公の人間的な側面の強調を読み取る解釈は、この作品全体の解釈にどのように影響を与えるであろうか。それは A.C. Bradley の “the hero's faults are repellent and chill our sympathy,”<sup>7)</sup> “he is what we call an impossible man”<sup>8)</sup> といった言葉に代表される、厳しく否定的な評価から主人公を解放し、悲劇の主人公としての尊厳をいくらかでも回復させることに貢献するであろう。ただ、その一方で、これらの改変が同時に主人公の非人間的な側面を強調していることも確かである。彼は戦いのさなかとあとの二度にわたって、この哀れな男のことを見捨てている。マーシャスの憐れみに基づく行動を途中で阻害してしまうこの非人間的な側面、マクミラン版の言葉を借りるなら “warrior code”, とはどのようなものであり、それはマーシャスにとってどのような意味をもっているのであろうか。次にそれを見ておきたい。

### (3)

実は、憐れみよりも敵にたいする怒りを優先させる価値観は劇中で描かれるローマ社会その

ものが持っている価値観であって、マーシャスはそれを忠実に実行しているにすぎない。ローマでは暴君タークインによる専制的な帝政を打倒した記憶がまだ生々しく残っている<sup>9)</sup>。マーシャスの初陣はまさにそのタークインを撃退した戦いであって、彼はそこで目覚ましい働きを示して注目を集めたのだ。今は共和制に移行しているとはいえ、まだ「武勇は最上の美德」(valour is the chiefest virtue) (II. ii. 84) とされている。シェイクスピアに現れるこの言葉は、プルタークの「当時のローマでは、武勇が他のすべての美德よりも尊重されており、それを美德そのものの名前を使って徳と呼んでいた」(In those dayes, valliantnes was honoured in Rome above all other vertues: which they called *Virtus*, by the name of vertue self)<sup>10)</sup>を下敷きにしている。“*Virtus*”は“*vir*”(男)を語源に持ち、「男らしさ」を意味している。したがって、「武勇」とは「男らしさ」のことに他ならなかった。

その「男らしさ」の実態がどのように残酷さを含んだものであるかを端的に示すのが、彼の幼い息子、小マーシャスをめぐるエピソードである。ある日小マーシャスは蝶を捕まえては放し、またそれを捕まえて放すということを繰り返して遊んでいる。やがて彼は何かのことでかっとして歯をくいしばったかと思うと蝶を目茶苦茶に引きちぎってしまう。そのことを聞かされた彼の祖母ヴォラムニアは眉を顰めるところか、「あれの父親にもそんなふうにかつとるところがあります。」(One on's father's moods.) (I. iii. 66) と言うだけである。また、そのことを彼女に話して聞かせた婦人ヴァレリアも、「本当にまあ、立派なお子さんだこと。」(Indeed, la, 'tis a noble child.) (67) と言って褒めているのである。

こうした残酷さを含んだ武勇中心の価値観は、少なくともマーシャスの母ヴォラムニアにとっては、人間関係のもっとも基本である親子間の情愛にさえ優越するものであった。次の彼女の言葉はそのことをよく物語っている。

私はあの子が生まれて男の子だったと初めて聞かされたときでも、あの子が自らが一人前の男であることを証明したのを知ったときほどには大喜びしなかった。……もしも私に十二人の息子があって、その一人一人が同じようにかわいく、お前の夫である私の息子マーシャスに劣らず大切に思われたとしても、その一人が戦にも出ず酒色に溺れているくらいなら、あとの十一人が国のために立派に死んでくれたほうが望ましい。

I sprang not more in joy at first hearing he was a man-child, than now in first seeing he had proved himself a man. . . . : had I a dozen sons, each in my love alike, and none less dear than thine and my good Martius, I had rather had eleven die nobly for their country, than one voluptuously surfeit out of action.

(I. iii. 16-18, 22-25)

こうした武勇中心の価値観が、母の教育の結果、マーシャスのなかにかいによく浸透し、血肉化していたかは、彼の「私らしい男らしい振る舞いだ」(I play / The man I am) (III. ii. 15



-16) という言葉によく現れている。彼の「男らしい振る舞い」(I play the man) は単なる演技ではない。彼は演技するまでもなくすでに「男らしい」(the man I am) ののである。<sup>11)</sup>

母ヴォラムニアによる過干渉とも思えるスパルタ教育はシェイクスピアの創造であって、ブルタークでは「教育の欠如のせいで彼はかっとしやすい短気な人間になった」(for lacke of education, he was so chollericke and impatient)<sup>12)</sup>と書かれている。シェイクスピアがこのように母ヴォラムニアによる教育を強調したことにより、マーシャスは教育の、武勇を他のすべての美德よりも高く称揚するローマ的価値観の教育の、成果という側面が強められている。そしてその価値観はまた貴族階級のものであって、平民であるローマ市民にたいする階級差別意識を伴っていた。マーシャスにとってローマとは貴族階級のものであり、平民たちはそのローマの「かさぶた」(scabs) (I. i. 165), 「黴の生えたあまりもの」(musty superfluity) (I. i. 225) であり、ヴォルサイ人の穀倉を齧らせるために連れていく「鼠」(rats) (I. i. 248) であった。そして、平民にたいするそのような差別意識はヴォラムニアをはじめとして他の貴族階級の者たちも程度の差はあれ皆持っているようにシェイクスピアは描いている。

マーシャスは母ヴォラムニアの教育を忠実な生徒のように受け入れ、その結果、ローマ社会の、それも特に貴族階級の、武勇を重んじる価値観のもっとも純粋な体现者となった。彼は帝政時代のローマでなら、もっと周囲と調和した生きかたをまっとうすることができたかもしれない。<sup>13)</sup>しかし、今は共和制に移行しており、平民階級は急速にその政治力に目覚めつつあった。彼らの権利を貴族の横暴から守るためとして初代の五人の護民官が選ばれもした。その護民官の一人シニアスの「民衆なくして何のローマ(市)だ」(What is the city but the people?) (III. i. 197) との問いかけに、平民たちは声をそろえて「そうだ、民衆こそローマ(市)だ」(True./ The people are the city) (197-8) と答える。平民たちにとっては「ローマ(市)」は「民衆」のものなのである。

共和制時代のローマは貴族と平民の間の身分闘争によって特徴づけられ、その歴史は貴族側の譲歩と平民側の権利拡大の歴史であった。マーシャスが貴族的な価値観に忠実に従いつつ栄光の頂点の上り詰めようとしたときというのは、共和制揺籃期で貴族的な価値観が大きく揺らぎはじめていた時代のことであった。彼はその武勲によって次期執政官の候補者となるものの、その階級差別的な態度を隠すことを潔しとしないため、執政官に選ばれるのに必要な民衆の賛同を得ることができないばかりか彼らの怒りを買って、ローマから追放される。彼は母ヴォラムニアを通じて吸収したローマの価値体系に忠実であろうとして、時代の流れに乗ることができず、いやむしろそれを依怙地なまでに拒否し、その結果貴族仲間からは「この世の中には高潔すぎる」(too noble for the world) (III. i. 253) と見なされ、護民官からは「切除しなければならない病根」(a disease that must be cut away) (292) と敵視されて社会から排除されてしまうのである。このように彼の悲劇は、彼を産み育てた社会の価値観、文化にたいして、それが変容しはじめたときにも、あくまでも「忠実」(constant) であろうとしたことに由来すると言えよう。彼はある意味では彼を産み育てた文化の、教育の被害者なのである。<sup>14)</sup>

## (4)

最後にふたたび「コリオライのHOST」のエピソードに戻ろう。シェイクスピアの改変は一方でマーシャスの人間的な面を強調しつつ、他方で彼の非人間的な側面を示すことであった。もしこのエピソードにおいてマーシャスの非人間的な側面のみを目を向けるならば、彼はまさに「我々の共感を冷ます」「いわゆるどうしようもない男」と映るであろう。しかし彼の人間的な側面にも目を向けるとき、特にシェイクスピアがその面を強調すべく改変を行ったのだと解釈するとき、彼に対する評価は違ったものになるであろう。鎧に身を包んだ姿そのままに、頑なまでに武勇中心の価値観に身を固めていた彼が、ふと漏らす憐れみを含んだ言葉に、我々は一瞬彼の温かな素顔をかいま見た思いがし、共感を誘われる。そして彼が男の名前を忘れてしまうとき、我々はその見捨てられた男にたいして憐れみを覚えるとともに、主人公にたいして、複雑な気持ちを覚える。一方ではそのように憐れみの心よりも残酷なまでに武勇を優先する価値観——そしてその体現者としてのマーシャス——にたいする嫌悪感がある。しかしまた他方ではそのような価値観を教え込まれた教育・文化の「被害者」としてのマーシャスにたいする憐憫の情がある。これらの感情がないまぜになって我々を襲うのである。

「コリオライのHOST」の挿話をめぐる、論者の「整理しがたい感情」は、以上のように整理された。その整理の仕方はマクミラン版の解釈に多くを負うものであった。この注釈書は論者が参照した五種類の注釈書のなかではもっとも初学者向きで、おそらく学問的な権威という点ではあまり高い評価を得ていないものである。しかし論者はこのエピソードの解釈に関しては、敢えてこの注釈書の評価をしたい。それはこの解釈の仕方だけが、論者がこの挿話を読み終えたときに覚える複雑で整理しがたい感情を、その複雑さをいたずらに単純化することなく、説明する助けを提供してくれるからである。

『コリオレイナス』が初めて書物となって出版されたのは1623年のThe First Folioにおいてであった。周知の通り、このシェイクスピア最初の戯曲全集は創作年代順ではなく、「喜劇」、「歴史劇」、「悲劇」というジャンル別に配列されていた。そして『コリオレイナス』はその「悲劇」の部の一番目に置かれ、そのタイトルは『コリオレイナスの悲劇』(*The Tragedy of Coriolanus*)であった。我々はこの戯曲を「悲劇」として読むことを期待されていると言ってよい。そして、この作品を「悲劇」として読むためには、やはりその主人公にたいする我々の共感が不可欠であろう。このように考えるとき、「コリオライのHOST」をめぐるシェイクスピアの改変に、主人公の人間的な側面の強調を読み取る解釈は、十分にその妥当性を主張できるように思われるのである。

## (注)

- 1) Christopher Pelling, "The Shaping of *Coriolanus*: Dionysius, Plutarch, and Shakespeare" in *Poetica*, 48 (Shubun International, 1997), p. 3 を参照。

- 2) 参照した『コリオレイナス』の注釈書は① R.B. Parker 編 *The Oxford Shakespeare* (Oxford Univ. Press, 1994), ② Tony Parr 編 *The Macmillan Shakespeare* (Macmillan Education, 1985), ③ Philip Brockbank 編 *The Arden Shakespeare* (Methuen, 1976), ④ G.R. Hibbard 編 *New Penguin Shakespeare* (Penguin Books, 1967), ⑤ John Dover Wilson 編 *The New Shakespeare* (Cambridge Univ. Press, 1960)の五種類である。本論考ではそれぞれ①オックスフォード版, ②マクミラン版, ③アーデン版, ④ペンギン版, ⑤ケンブリッジ版と表記する。ただし, それぞれの注釈からの引用については, 煩雑さを避けるため, いちいちページを示さないことにする。
- 3) Geoffrey Bullough, *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. V (Routledge, 1964), p. 514. 以下, ノース訳『英雄伝』からの引用は同書によるが, 「コリオライのホスト」の挿話は同書の p. 515 に限定されているので, 引用にあたってページを示すことは省略する。また, 訳文の作成にあたっては河野与一訳『プルターク英雄伝(三)』(岩波書店〔岩波文庫〕, 1953)を参照したが, 同訳がプルタークからの直接の翻訳であって, ノースによる英訳からの翻訳ではないため, あくまでも参考に留めた。
- 4) シェイクスピアからの引用はアーデン版による。訳文の作成にあたっては木下順二訳『シェイクスピア VIII コリオレイナス テンペスト』(講談社, 1989)と小田島雄志訳『シェイクスピア全集 III』(白水社, 1975)を参照した。
- 5) Vivian Thomas, *Shakespeare's Roman Worlds* (Routledge, 1989), pp. 191-2.
- 6) ちなみにこの劇の冒頭でローマ市民の一人は, 平民階級にたいする貴族階級の差別的な態度を訴える言葉のなかで, “We are accounted *poor* citizens, the patricians good [=wealthy]” (I. i. 14)〔斜字体論者〕と言っている。
- 7),8) A.C. Bradley, “Coriolanus”, British Academy Shakespeare Lecture for 1912, in *Studies in Shakespeare*, ed. P. Alexander (Oxford Univ. Press, 1964); reprinted in *Shakespeare: Coriolanus: Casebook Series*, ed. B.A. Brockman (Macmillan, 1977) p. 54, p. 60.
- 9) タークインを撃退した戦いの記憶がまだ新しかったことは, その撃退戦への言及がこの作品中で三回 (II. i. 148-9, II. ii. 87-98, V. iv. 43-4) も現れることから窺われる。
- 10) Bullough, *op. cit.*, p. 506.
- 11) この台詞に関して Janet Adelman は次のように述べている。“Coriolanus would like to suggest that there is no distance between role and self, but in fact suggests that he plays at being himself.” (Janet Adelman, ““Anger’s My Meat”: Feeding, Dependency, and Aggression in *Coriolanus*” in *Shakespeare: Pattern of Excelling Nature*, ed. David Bevington and Jay L. Halio [Associated Univ. Press, 1978]; reprinted in *William Shakespeare’s Coriolanus: Modern Critical Interpretations*, ed. Harold Bloom [Chelsea House Publishers, 1988], pp. 81-2.)
- 12) Bullough, *op. cit.*, p. 506.
- 13) マーシャスの貴族優先の価値観と平民階級の権利との摩擦については Leah S. Marcus, *Puzzling Shakespeare* (Univ. of California Press, 1988) pp. 202-11 を参照。
- 14) マーシャスはローマがヴォラムニアの教育を通じて造り上げのものであり, 彼はローマの武勇中心の価値観の被害者なのだという視点に関しては, Anne Barton, *Essays, Mainly Shakespearean* (Cambridge Univ. Press, 1994), pp. 136-60, Coppélia Kahn, *Roman Shakespeare: Warriors, Wounds and Women* (Routledge, 1997), pp. 144-59, Coppélia Kahn, *Man’s Estate* (Univ. of California Press, 1981), pp. 151-92, Geoffrey Miles, *Shakespeare and the Constant Romans* (Clarendon Press, 1996) pp. 149-68, Marilyn French, *Shakespeare’s Division of Experience*

(Jonathan Cape, 1982), pp. 265-76, R.B. Parker, "Coriolanus and 'th'interpretation of the time" in *Mirror up to Shakespeare: Essays in Honour of G.R. Hibbard*, ed. J.C. Gray (Univ. of Toronto Press), pp. 261-76, Jacqueline Pearson, "Romans and Barbarians: The Structure of Irony in Shakespeare's Roman Tragedies" in *Shakespearean Tragedy: Stratford-upon-Avon Studies 20*, eds. Malcolm Bradbury & David Palmer (Homes & Meier Publishers, 1984) pp. 159-82 等を参照。